

元で文化事業を展開していたY氏で、会場は定員約500の葉山町福祉文化会館、年間4公演で会費は12,000円、初年度の出演者として園田高弘、関貞子、ウィーン・オットー・ニコライ・クァルテット、ダニエル・ゲーデを並べ、2年目以降の出演者としてペーター・シュライヤーやウィーン弦楽四重奏団等々を「予告」して「会員の募集は、定員に達し次第停止する」とした。「この機会を逃しては……」ということで、400人近い会員が集まった。ところが、2回目のコンサートが終わった後、Y氏が舞台上上がり「このままでは運営がたち行かないので、どなたか助けてほしい……」と、ここで元日本航空のパイロット山脇利雄氏が「プログラム制作のお手伝いぐらいなら……」と手を上げたのだが、気が付くと運営全般を背負うことに！ 引き継いだ口座には残金が百数十円だったとか、印刷屋への支払が滞っていたとか、というのは序の口で、「予告」されていた出演者については契約どころかマネジメントへの話すらされていなかったのである。ここからは、山脇氏の悪戦苦闘、それでもシュライヤーの代わりにはテオ・アダムを確保（想定外の金額を必要としたとのこと）し、ウィーン弦楽四重奏団の代わりにはウィーン八重奏団を実現するなど……、会員も増加して数年後には定員に達し、キャンセル待ちも出るようになった。会員は高齢者が多いので、毎年一定数減少する。そこで葉山・逗子周辺に新聞折込を入れると、また定員一杯に回復する。葉山室内楽鑑賞会の存在は、他の地域ではほとんど知られてこなかったが、それは他の宣伝、「音楽の友」や「ぶらあほ」のガイド欄にすら載せる必要がなかったことにもよるのである。

加えて、会員制度が機能したこと（「あるコンサートは発売と同時に完売でも、次のコンサートは50席も売れなかった！」では会を続けることはできないのだから）、開催日の土休日は隣の役場の駐車場が全面的に利用できたこと（車以外では、葉山の会館へは逗子駅からバスを利用するしかない）、そして何より山脇氏が出演者についてよく研究すると共に、各マネジメントとも良好な関係を維持して毎回質の高いコンサートを開催しつづけたことである。

一見、順調であったかのように見えるが、会の運営には大変な苦勞を伴っていた。特にホールの確保は、毎回綱渡りの連続、葉山町の条例では会館使用の決定は、使用日の6か月前で、先着順。加えて役所は、空いているはずの公演予定日に突如行事を入れてくるということも！ 当然のことながら、鑑賞会に出演す

るような一流アーティストの日程は1年以上前には決まってしまう。そこで山脇氏は、正式の決定はホール確保後で、ホールが確保できない場合にはキャンセルせざるを得ないということの了解をその都度取らなければならなかったし、6か月前には前日から自ら出向き（アルバイトを使うことは禁止されている）車中で一泊するというのを繰り返さざるを得なかったのである。この間、「ホールを優先確保するために、町に共催してほしい」旨を繰り返し要請したが、町からは「クラシック音楽だけを特別扱いするわけにはいかない。」とのことであつたとか……。

山脇氏は、80歳を迎えることもあり、後継に託すべく努力したが、ホール取りの問題がネックになってしまった。やむなく、その前年から会員の新規募集を停止して、2015年一杯をもって会の活動を休止することとした。16、17年の2年間は、コンサートのない状態が続いたのだが、この間会員や町民の方々等から町への働きかけがあつた。「町が共催してホールの優先確保を認めるだけで、町は何のリスクも負うことなく、町内で年間4回のきわめてレベルの高いコンサートが開かれるのだから……」。こうした中で、町の対応にも変化が現れ、「これまでの町の文化発展への貢献に対して」ということで、山脇氏が町から表彰され、コンサートについても町が「できるだけ協力したい」とのこと！ その後、話し合いが続けられ、ホールの優先確保と使用料の減免（半額）が決定し、鑑賞会も町の文化向上に尽力することとなった。その最初の実践として、昨年11月に鑑賞会のコンサートの前日に出演者のザイール四重奏団（フランスのサクソフォン・クァルテット）が葉山小学校を訪問して、同校の体育館で演奏した。また、この町との話し合いでは、「誰もが聴けるコンサートにしてほしい」という要望も出され、4公演セット券購入者（かつての会員）は450名までとして、50人分の1回券を確保することとなった。さらに、新運営委員への参加も広く呼びかけられ、10人近い人が集まり、新会長には町内でオーディオ関連会社を経営する峰松啓氏が就任し、同氏が経営する会社の一角に事務局が置かれることとなったのである。

2018年の春にコンサートを再開することとして準備が始められた。2年にわたり新規募集が停止されていたこともあって、500人いた会員は428人まで減少していたが、その会員に「会員継続のお願い」が発送されると、400人近い人たちが継続に応じた。残されていた資金を使って新聞折込による宣伝が行われ、朝

日新聞の地方版でも紹介されて、450人の定員は一杯となったばかりか、20数人のキャンセル待ちまで確保することとなったのである。2018年5月13日、満員の聴衆が集まり、「仲道郁代ピアノ・リサイタル」で葉山室内楽鑑賞会は再スタートを切ることとなった。

葉山室内楽鑑賞会会員数の推移

1996	400 ?	活動開始新聞折込広告
7	454	
8	412	新聞折込広告 50,000部
9	500	
2000	480	
1	430	新聞折込広告 47,000部
2	471	
3	422	新聞折込広告 35,000部
4	503	
5	508	キャンセル待ち
6	507	キャンセル待ち
7	506	キャンセル待ち
8	491	
9	475	新聞折込広告 42,000部
10	520	キャンセル待ち
11	508	キャンセル待ち
12	477	
13	504	
14	451	新会員募集停止
15	428	
16		活動休止
17		活動休止
18	480	活動再開キャンセル待ち

## まとめ

葉山室内楽鑑賞会は、2年間の休止を経て無事活動を再開したが、この間に運営に関わる市民の輪は広がり、町との関係も新たな段階に入った。会は、その自主的な運営を維持しつつ、ホールを優先的に確保することが可能となったことによって、安定的にコンサートを開催できるようになった。また、町は財政的負担やリスクを負うことなく、町内で質の高いコンサートが年4回開催できるのである。官民の新たな関係が形成されつつあるといえよう。

人口減少が深刻化する状況下、文化予算の削減は今後さらに深刻化するものと考えられる。そうした中で、どうコンサートを維持するか、また新たにコンサートをつくるか？ まず、現在コンサートを開催している会館や公共団体の関係者（その多くが指定管理で、その担当者の多くが契約社員である現状では大変に厳しいことはよく分かるが……）には、予算の確保に努めていただくと共に、たとえ予算を削減されたとしてもコンサートを続けてほしいのである。そのコンサートを止めてしまえば、その地域は砂漠化してしまうのだから。もちろん、知恵を絞り、工夫を凝らし、何よりも長期にわたる継続的な取り組みは必要だが、税金を使わずとも、大企業の援助がなくとも、クラシック・コンサートの開催は可能である。

また、もし自主公演をしていなくて、地域の市民の間からコンサートを開こうという動きが生まれたなら、「素人に……」などという発想を捨て、応援してほしいのである。私を含め、全国で活動する民間主催者（前述の山脇氏も）のほとんどが「素人」から出発しているのである。